

IV. 本学の成績評価システムと学修の質の保証

1. 成績評価の目的と望ましい成績評価

個性、特色、果たすべき役割などを明示した本学のビジョン「北海道科学大学の基本姿勢」に

| | |
|----------|---|
| 3. 教育目的 | 時代の要請に即した専門領域で輝きながら、北海道およびわが国の活性化を実質的に支え得る人材を育成する。 |
| 4. 教育指針 | 学科ごとのきめ細やかなカリキュラム、教育指導により、 ① 専門領域の基礎知識群とそれらの繋がり（知識の枠組み）を獲得する、 ② 自ら学習する能力（学習力）を身につける、 ③ 自分の得意分野を見出す、 ④ 自らの専門能力を高め、あるいは広げる、 ⑤ 専門能力を社会に役立てるために必要な関連知識とスキルを獲得する、 ことを支援しながら、教育目的を達成する。 |
| 5. 教育の特色 | [1] 学生の立場に基づく教育 【教育システム】 ・専門領域ごとに最適設計された教育・学習プログラム |

と掲げられています。この「本学の基本姿勢」に沿うべく、成績評価の目的を「**プロフェッショナルへのいざない**」に設定します。この目的のための望ましい成績評価は、次のようなものです。

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・得意専門分野を見つけ易く、専門適性のスペクトルを知りやすい成績評価 ・得意分野を活かす知力のレベルを把握しやすい成績評価 ・プロフェッショナルとしての教養レベルを把握しやすい成績評価 ・達成感を獲得しやすく意欲を湧出しやすい成績評価 ・それ自体で「学修の質の保証」の一端を担い得る成績評価 |
|---|

2. 成績評価項目スキーム（基本構成）

◎ 科目群を2種類に区分します。

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・専門科目：時代の要請に即した専門領域で輝きながら、北海道およびわが国の活性化を実質的に支え得るための専門科目（2年次以降開講の専門教育科目、ただし1、2年次に同内容で実施の重複開講科目[a、b科目]の2年次b科目を除く） ・活性化科目：専門科目の修得を支援する科目＋得意分野を活かす科目＋教養科目（上記専門科目以外の卒業要件科目、教職に関する科目もこれに準ずる） |
|---|

◎ 成績評価項目（保証すべき質の内容＝保証対象能力）を類型化します。

| | | |
|-----------------|-------------|--|
| 個々の知識／スキルの量と正確性 | 学術系 | 概念、測度（単位を含む）などの個別的知識の量と質 |
| | 言語系 | 語彙、熟語の量・質、文法の正確性 |
| | 体育系 | 個々のプレーの量・質、ルール把握の正確性 |
| 知識体系の獲得度 | 学術系 | 個別の知識間の対応関係や測度間の定量的関係の獲得度 |
| | 言語系 | 定型表現例の獲得度、類似表現との差異の獲得度、発音規則等の獲得度 |
| | 体育系 | 運動理論の獲得度、連係プレーの獲得度 |
| 解析力 | 学術系 | 種々の条件が与えられた場合における結果を導出する能力 |
| 実践力 | 学術系・言語系・体育系 | 獲得した知識体系を具体例に活用できる能力 |
| 構成力 | 学術系 | 多ステップの導出プロセスを選び連結させながら解に到達できる能力 与えられた目標を満たすための条件群や論旨を組み合わせ、構成する能力 |
| | 言語系 | 文を組み合わせて目的を満たす論旨を表現する能力、コミュニケーション能力 |
| | 体育系 | ゲームを構成する能力、コーチング能力 |
| 展開力 | | 獲得済みの知見から新しい知見へ展開できる能力 |

- 2) 評価は、二つ以上の評価手段（試験、レポートなど）を用いるか、あるいはひとつの手段の場合は複数回実施し、その総合結果により行います。
- 3) 専門科目での成績評価は、科目の達成目標全体に関する到達レベルを評価できる手段を主（60%以上）とし、他を補強手段とします。
- 4) 法規関係科目を除く専門科目の成績評価には、必ず「展開力」の評価を含め、相当分の特別加点を用意します。ただし「卒業研究」には特別加点はありません。また、「都市環境学科」は「日本技術者教育認定」の受審を視野に入れているため、この学科の専門科目を除きます。
- 5) 活性化科目については科目ごとに、達成目標に応じて最も相応しい方法で評価します。
- 6) 各科目の達成目標は、該当学科等の「教育目的」「教育指針」「教育・学習目標」に応じて、毎年各学科の「カリキュラム編成会議」で検討・決定します。「卒業研究」の評価方法や評価項目についても、それぞれの学科で決定します。

◎ 各成績評価項目と評価手段の基本的な関係は、次のようになっています。

| 〔専門科目〕 成績評価項目 | 評 価 手 段 | | | |
|------------------|---------|------|------|-----------|
| | 小テスト | 中間試験 | 期末試験 | レポート／提出課題 |
| 個々の知識の量と正確性 | ↕ | ↕ | ↕ | ↕ |
| 知識体系の獲得度 | | | | |
| 解析力 | | | | |
| 構 成 力 | | | | |
| 展 開 力 | | | | |

実験科目では、実験レポート内容により項目ごとの評価がなされ、特に“考察”の内容により「展開力」も評価されます。

| 〔活性化科目〕 成績評価項目 | 評 価 手 段 | | | |
|---------------------|---------|------|------|-----------|
| | 小テスト | 中間試験 | 期末試験 | レポート／提出課題 |
| 個々の知識／スキルの量 と正確性 | ↕ | ↕ | ↕ | ↕ |
| 知識体系の獲得度 | | | | |
| 解析力／実践力／構成力 | | | | |

◎ 評価の際の配点標準（保証すべき「学修の質」の定量モデル）

各評価項目に対する配点割合は、到達レベルを評価できるように（達成度評価は100点満点）科目毎に最適配分しますが、法規関係科目と「卒業研究」を除く専門科目では、配点割合に以下の範囲が定められています。また、付加される達成度超過特別加点は10点とします。

それぞれの評価項目がどの評価手段に配分されるかは、授業計画書（シラバス）に明記されます。

| | | | | | | | | | | | |
|-------------------|----------|-----------------------|------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 展開力 応用力 知識力 | } | 展 開 力 | 10 | } | } | } | } | | | | |
| | | 構 成 力 | min. | | | | | } | } | } | } |
| | | 解 析 力 | 60 | | | | | | | | |
| | 知識体系の獲得度 | max. | } | | | | | } | } | } | |
| 個々の知識の量と正確性 | 40 | 構 成 力 / 実 践 力 / 解 析 力 | | } | } | } | | | | | |
| | | 知 識 体 系 の 獲 得 度 | } | | | | } | } | } | | |
| | | 個々の知識の量と正確性 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |

〔専門科目〕

評価項目

配点

〔活性化科目〕

評価項目

配点

4. 「厳格な成績評価」のための成績表記と総合成績評価指標

◎ 基本的な考え方は、次の4項目にまとめられます。

- 1) 「成績評価の目的と望ましい成績評価」（「得意専門分野を見つけやすい」「達成感を獲しやすく意欲を湧出しやすい」）などを満たすためには、合格の点数範囲（dynamic range）が広いことが望ましいと言えます。また、“きめ細やかな教育指導”を行うためには、不合格の内容が把握できることが必要です。
- 2) さらに、得意分野を見つけたことに配慮した総合成績指標を用意することが効果的です。
- 3) 但し、各学科は“専門領域ごとに最適設計された教育・学習プログラム”を用意していますから（「基本姿勢5. 教育の特色」に記載）、学科間の転学科、他大学との単位互換、就職活動などに不可欠な成績証明書などのために、わが国の標準的な成績区分も必要です。
- 4) このため、「基本姿勢3. 教育目的」に沿った本学独自の成績表記、総合成績評価指標 QfGPA（「学生の特長に焦点をあてた総合成績評価指標」：Quality focused GPA）と、わが国の標準的な成績表記、総合成績評価指標 GPA の双方を用意しています。

◎ 成績表記と成績区分

各科目の得点と成績表記、成績区分、および QfGP 表記の基準は、次のようになります。合格点は60点です。

| 得点(特別加点を含む) | QfGP 表記 | QfGP | 成績区分 | GP | 合否 |
|-------------|----------------|------|------|----|-----|
| 101~110 | S ⁺ | 5 | 秀 | 4 | 合格 |
| 90~100 | S | 4 | | | |
| 80~ 89 | A | 3 | 優 | 3 | |
| 70~ 79 | B | 2 | 良 | 2 | |
| 60~ 69 | C | 1 | 可 | 1 | |
| 45~ 59 | D | 0 | (不可) | 0 | 不合格 |
| 0~ 44 | E | | | | |
| | F | | (失格) | | |
| | X | | | | |

QfGP 表記の基準

- S⁺ : 達成目標を超えている
- S : 達成目標をほぼ完全に満たしている
- A : 達成目標を十分満たしている
- B : 達成目標を満たしている
- C : もう少し余裕が欲しいが達成目標はほぼ満たしている
- D : 達成目標を満たすためにはもう少し努力が必要だった
- E : 達成目標を満たすためにはもう一度最初からやり直す必要がある
- F : 目標達成度はD以上であるが、欠席過多等の必要条件を満たさなく失格
- X : 試験放棄等、履修放棄のため失格

- ・得点は1点刻みとしますが、教員からの成績報告は、全科目とも QfGP 表記で行います。
- ・学業成績表、成績順位、学習指導には QfGP 表記・QfGPA を使い、転学科、対外的な成績区分（成績証明書など）には GPA を用います。成績証明書に「不合格」は記入されません。

5. 総合成績評価指標 QfGPA, GPA の算出

(1) QfGPA (Quality focused Grade Point Average)

◎ 種類と算出対象

卒業要件の対象となっているすべての科目に対して、総合的に成績が評価されますが、次の2種類があります（教職に関する科目は含みません）。

- ・当該セメスタでの学修結果に対する QfGPA (=QfGPA-S)
- ・修得単位数を考慮に入れた当該セメスタまでの学修成果の質、すなわち「進級の質」「卒業の質」を示す QfGPA (=QfGPA-T) ※いずれの場合も、認定単位を除く該当科目が10単位未満のときは算出されません。

◎ 算出式

算出式を次に示していますが、基本的に次の性質を有しています。

- ・すべて同じ QfGP を獲得すると、QfGPA は QfGP と等しくなります。
- ・QfGP の和が同じ値であっても、得意分野を持っている方が高い QfGPA になります。

$$QfGPA-S = \sqrt{\frac{\sum_i u(i) \times QfGP(i)^2}{\sum_i u_s(i) + \sum_j u_h(j)}}$$

i : 当該セメスタでの修得科目
j : 当該セメスタでの履修登録科目
u (·) : 科目の単位数
u_s (·) : 選択科目の単位数
u_h (·) : 必修科目の単位数

注：ルート内＝

$$\frac{\text{当該セメスタで修得した科目の（単位数} \times \text{QfGP}^2 \text{）の総和}}{\text{当該セメスタにおける（修得した選択科目} + \text{履修登録した必修科目）の単位数の和}}$$

$$QfGPA-T = \frac{\min[U_a, U_0]}{U_0} \sqrt{\frac{\sum_m u(m) \times QfGP(m)^2}{\sum_m u_s(m) + \sum_n u_h(n)}}$$

U₀ : 進級・卒業に向けての標準総単位数（各学科・各学年ごとに決定）
U_a : 実際の修得総単位数（認定単位を含む）
m : 当該セメスタまでの修得科目、*n* : 当該セメスタまでの履修登録科目

注1：ルート内＝

$$\frac{\text{当該セメスタまでに修得した科目の（単位数} \times \text{QfGP}^2 \text{）の総和}}{\text{当該セメスタまでの（修得した選択科目} + \text{履修登録した必修科目）の単位数の和}}$$

注2：ルートの前の乗数項＝

$$\frac{\text{（当該セメスタまでの修得総単位数）と（進級、卒業に向けた標準総単位数）の少ない方}}{\text{進級、卒業に向けた標準総単位数}}$$

- ・ルート内分母の計算は、選択科目は修得単位数の合計、必修科目は履修登録科目すべてです。
- ・教職に関する科目に加え、単位認定された科目も除きますが、*U_a* の算定時には認定単位を含みます。
- ・標準総単位数 *U₀* の設定は、

- ① 余裕を持って進級できる最少の単位数、② 余裕をもって就職活動ができる単位数、③ 4年次における修得すべき適正単位数の確保

を踏まえ、学科ごとに進級基準と特色を考慮し設定されます。

(2) GPA (Grade Point Average)

◎ 種類と算出対象

教職に関する科目・単位認定科目を除く科目を対象としますが、次の1種類のみです。

| | |
|---------------------------------|--------------------------|
| ・当該セメスタまでの学修結果に対する GPA (=GPA-T) | ※該当科目が10単位未満のときは算出されません。 |
|---------------------------------|--------------------------|

◎ 算出式は次式のとおりです。

$$\text{GPA-T} = \frac{\sum_{m} u(m) \times \text{GP}(m)}{\sum_{m} u(m)}$$

m : 当該セメスタまでの修得科目

注 : GPA-T =

当該セメスタまでに修得した科目の(単位数×GP)の総和

当該セメスタまでの修得総単位数

6. 「学修の質の保証」のために

従前より、学生諸君による授業改善アンケート、ファカルティ・デベロプメント (FD)、セメスタ制の特長活用、少人数教育の適正拡充、シラバスの充実、ティーチング・アシスタント (TA) による授業補助、などの方策により「学修の質の保証」が図られてきました。

以上のほか、上述の成績評価結果を連動させながら、次のような履修方法に関するシステムが導入されています。詳しくは、履修ガイドの「Ⅲ. 全学共通履修ガイド」を参照してください。

(1) 履修登録上限単位数

単位修得の条件である毎回の授業のための“予習”“復習”時間を十分確保できるようにし、良い成績で単位修得を可能にするため、「セメスタあたりの履修登録単位数」に上限が設定されています。「質の高い学修」は就職や進学に必要なかつ有効と判断し、平成19年度入学生から実施しています。開講単位が設定値を超えているセメスタでは、十分に検討し履修計画を立て、また登録した科目はしっかり受講することが大切です。特に履修登録漏れのないように注意してください。

- ・この制限は、単位認定科目を除く卒業要件に含まれるすべての科目が対象となります。
- ・設定値については、低学年次における得意分野の探索、高学年次における充実した卒業研究への備えが考慮されています。

(2) QfGPA-Sによる履修登録上限単位数の制限

本学の「成績評価と学修の質の保証」システムは、「北海道科学大学の基本姿勢」の中に明示されている教育目的・教育指針を、明確に具現化するために構築されています。とりわけ、「履修科目の確実な学修」「得意専門分野の獲得」を、学生諸君は強く意識しなければなりません。

このシステムを実効あるものにするために、QfGPA-Sの値が低過ぎる場合には、「セメスタあたりの履修登録単位数」に制限が加えられます。具体的には、次のとおりです。

| |
|--|
| 2セメスタ連続して QfGPA-S < 1.4 の場合、さらに QfGPA-S < 1.2 の場合の2段階で、翌セメスタに対する学科ごとの制限値が設定される |
|--|

前者の場合はその後の順調な進級が阻害されることはありませんが、後者の場合は、進級ペースが多少落ちることを覚悟しなければなりません。ガイダンスでの説明を、十分に理解してください。

(3) 成績C科目の特定再履修 —直接的な「学修の質」保証策—

「学修の質の直接的な保証」のキーツールとして、成績C科目に対する「特定再履修」を導入しています。履修科目の成績は、合格点が得られると再度の履修は認められず、従って学生諸君もそのことを明確に認識する必要がありますが、成績がCの場合に限り、再度の挑戦を認めるものです。後述の「履修方法」の欄をよく読んで理解してください。